

【田原市博物館 テーマ展】

華椿系画家たちの絵画学習

—下絵・粉本・手控帳—

令和6年11月30日(土)

～令和7年2月9日(日)

絵画を描く前に画家たちは下絵を制作し、どのような構図や図様を描くか試行錯誤していました。また画家たちは古い絵画を見たり、写したりすることで、画技を深めていました。本展では、華椿系画家が残した下絵・粉本・手控帳より、いかに絵画を学んでいいたかをご覧ください。

展示室

特別展示室

指定	作者	作品名	制作年	材質	形状	備考
重文	わたなべかざん 渡辺華山	せんざんぼんすいず 千山万水図	天保12(1841)年	絹本着色	掛幅	
	わたなべしょうか 渡辺小華	せんざんぼんすいず 千山万水図	明治時代	紙本墨画淡彩	掛幅	渡辺華山筆「千山万水図(当館蔵)の模本
重文	わたなべかざん 渡辺華山	わたなべはしゅうぞうがこう 渡辺巴洲像画稿	文政7(1824)年	紙本墨画	掛幅	
	つばきんざん 椿 椿山	きたがわそうせつじゅうにびょうぶもほん 喜多川相説十二屏風模本	文政8(1825)年	紙本墨画淡彩	マクリ	
	椿 椿山	ぎょくどうふきずがこう 玉堂富貴図画稿	江戸時代後期	紙本墨画淡彩	マクリ	椿椿山筆「玉堂富貴図」(泉屋博古館蔵)の画稿
	椿 椿山	いちらんしゆくず 一覽縮図	文政2～3(1819～1820)年	紙本墨画淡彩	冊子	
	椿 椿山	りぎょ 鯉魚図	江戸時代後期	紙本墨画淡彩	マクリ	
	椿 椿山	えんおうしょうきんず 鶯鷲小禽図	文政11(1828)年	紙本墨画淡彩	マクリ	金子金陵の作品の模本
	椿 椿山ほか	もほんるい 模本類	江戸時代後期	紙本墨画淡彩	マクリ	
	椿 椿山	がこうるい 画稿類	江戸時代後期	紙本墨画淡彩	マクリ	
	椿 椿山	たくかどうがこう 琢華堂画稿	天保11～13(1840～42)年	紙本墨画淡彩	冊子	
	あきのぼいどう 浅野梅堂	げいぎずもほん 芸妓図模本	文久2(1862)年	紙本墨画淡彩	掛幅	渡辺華山筆「芸妓図」(静嘉堂文庫美術館蔵)の模本
	まつばやしけいげつ 松林桂月	げいぎずもほん 芸妓図模本	明治28(1895)年	紙本墨画淡彩	掛幅	個人蔵 渡辺華山筆「芸妓図」(静嘉堂文庫美術館蔵)の模本
	のぐちゆうこく 野口幽谷	けいじょうすいせんかづ 溪上水仙花図	明治26(1893)年	絹本着色	掛幅	
	松林桂月	けいじょうすいせんかづもほん 溪上水仙花図模本	明治時代	紙本墨画淡彩	マクリ	野口幽谷筆「溪上水仙花図」(当館蔵)の模本
	野口幽谷	びやくえかんのんぞう 白衣観音像	明治29(1896)年	絹本着色	掛幅	個人蔵
	松林桂月	びやくえかんのんぞうもほん 白衣観音像模本	明治時代	紙本着色	マクリ	個人蔵
	松林桂月	せいじょうつねごてんろうかすぎとえもほん 聖上常御殿廊下杉戸絵模本	明治27(1894)年	紙本墨画淡彩	マクリ	個人蔵
	松林桂月	せいじょうつねごてんろうかすぎとえもほん 聖上常御殿廊下杉戸絵模本	明治27(1894)年	紙本墨画淡彩	マクリ	個人蔵
	松林桂月	めいかじゅうゆうずもほん 名花十友図模本	明治時代	紙本着色	マクリ	個人蔵 椿椿山筆「名花十友図」(上野記念館蔵)の模本
	松林桂月	きんぷ 禽譜	明治35(1902)年	紙本墨画淡彩	マクリ	個人蔵
	松林桂月	じんぶつふ 人物譜	明治35(1902)年	紙本墨画淡彩	マクリ	個人蔵
	松林桂月	かそず 果蔬図	明治時代	紙本墨画淡彩	マクリ	個人蔵 椿椿山作品の模本
重美	渡辺華山	じんごづこう 壬午図稿	文政5(1822)年	紙本墨画淡彩	冊子	
重美	渡辺華山	きやくざしやうき 客坐掌記	天保3(1832)年	紙本墨画淡彩	冊子	
重美	渡辺華山	きやくざしやうき 客坐掌記	天保9(1838)年	紙本墨画淡彩	冊子	
	渡辺華山	きやくざしやうき 客坐掌記	江戸時代・天保年間	紙本墨画淡彩	冊子	
	渡辺華山	だつべき 脱壁	文政7(1824)年	紙本墨画淡彩	冊子	
	渡辺華山	ぐうがどうざいひつ 萬画堂随筆	江戸時代・文化年間	紙本墨画淡彩	冊子	
	椿 椿山	かかんろく 過眼録	江戸時代・天保年間	紙本墨画淡彩	冊子	
	椿 椿山	かかんしやうき 過眼掌記	江戸時代・天保～嘉永年間	紙本墨画淡彩	冊子	
	おだほせん 小田莆川	きやくざしゆくず 客坐縮図	弘化3(1846)年頃	紙本墨画淡彩	冊子	

重文＝重要文化財 重美＝重要美術品 表記のないものは全て当館所蔵

田原市博物館

< 作者紹介 >

渡辺華山 寛政5(1793)年～天保12(1841)年
渡辺定通の長男として、江戸に生まれました。はじめ平山文鏡に師事し、白川芝山、金子金陵、谷文晁らに絵を学びました。華山は写実的な描写にこだわりました。特に肖像画を得意とし、西洋の陰影法を巧みに使い、独自の画風を確立しました。

椿 椿山 享和元(1801)年～嘉永7(1854)年
はじめ金子金陵に師事しました。金陵が亡くなった後、同じく金陵の門下であった渡辺華山の弟子になります。蛮社の獄で華山が逮捕された際は、その救済に奔走しました。華山没後は、華山の家族を献身的に支えました。花鳥画を得意とし、輪郭線を描かない方法で花卉図などを多く制作しました。

渡辺小華 天保6(1835)年～明治20(1887)年
渡辺華山の次男です。小華が7歳の時に、父である華山が亡くなりました。その後、椿椿山の画塾に入門し、花鳥画の技法を習います。22歳の時、兄の立の死後、渡辺家の家督を継ぎ、30歳で田原藩の家老に就きました。明治維新後、内国勸業博覧会への出品や明治宮殿の杉戸絵など制作しました。

山本梨谷 文化8(1811)年～明治6(1873)年
石見国津和野(現在の島根県津和野市)で生まれました。はじめ津和野藩家老の多胡逸齋に絵を学びました。江戸へ出府後、渡辺華山の弟子になり、天保11(1840)年には椿椿山へ入門します。嘉永6(1853)年、津和野藩絵師になりました。山水画や人物画を得意としました。

小田莆川 文化2(1805)年～弘化3(1846)年
旗本戸川氏に仕える家の末子として生まれました。渡辺華山の弟子となり、兄弟子である椿椿山と深く交友しました。椿山から手ほどきを受けたため、莆川の花鳥画には椿山の影響が見られます。華山が蛮社の獄で捕らえられた際、椿山と共に華山救済のために奔走しました。

浅野梅堂 文化13(1816)～明治13(1880)年
旗本・浅野長泰の子として、江戸に生まれました。赤穂藩浅野家の支族。名は、長祚、「梅堂」は晩年の号。幼少より漢詩、和歌を学び、絵ははじめ栗本翠庵に師事し、のちに椿椿山の門下となりました。花卉図を得意とし、「果蔬図」(東京国立博物館蔵)などがあります。

野口幽谷 文政10(1827)年～明治31(1898)年
大工の棟梁源四郎の次男として江戸に生まれました。嘉永3(1850)年、椿椿山に師事し、花鳥画を習いました。明治5(1872)年のウィーン万国博覧会や明治10年の第1回内国勸業博覧会に出品し、画技を認められました。明治23年、橋本雅邦らとともに帝室技芸員に任命されました。弟子に椿山の孫である椿二山や松林桂月などがいます。

松林桂月 明治9(1876)年～昭和38(1963)年
山口県萩市に生まれました。明治26(1893)年に上京し、翌年、野口幽谷の弟子になります。日本美術協会展や文展に出品し続け、南画界の重鎮と言われます。昭和19(1944)年、優秀な美術家へ与えられる帝室技芸員に任命され、昭和33(1958)年には文化勲章を受けました。

《主要参考文献》

- ・「小川義仁氏寄贈 華椿系画家資料」『田原市博物館年報』第8号、2002年)
- ・鈴木利昌「渡辺華山・椿椿山の縮図冊からさぐる学習内容」(『田原市博物館研究紀要』第7号、2015年)
- ・鈴木利昌「椿椿山の縮図冊『過眼録廿』の学習内容」(『田原市博物館研究紀要』第8号、2016年)
- ・増山禎之、菊池辰夫、山田哲夫、小林一弘、渡辺充子「椿椿山の基礎研究 I 序説 椿山基礎資料の紹介」(『田原市博物館研究紀要』第9号、2020年)
- ・増山禎之「館蔵 浅野梅堂筆 渡辺華山「芸妓図」模本」(『田原市博物館研究紀要』第10号、2021年)
- ・板橋区立美術館「椿椿山展—軽妙淡麗な色彩と筆あと」2023年
- ・三宅良宜「野口幽谷筆「溪上水仙花図」について」(『田原市博物館研究紀要』第12号、2023年)